

# 個の適切な援助を促すための子どもの実態の読み取りの質 に関する実践研究

## — 個別支援計画に盛り込むべき内容への示唆 —

西垣 吉之<sup>1)</sup>・橋村 晴美<sup>1)</sup>・鈴木 公二<sup>2)</sup>・西垣 直子<sup>3)</sup>  
Dalrymple 規子<sup>4)</sup>・岡田 泰子<sup>4)</sup>・寺見 陽子<sup>5)</sup>

### A Practice Study in how the Good Understanding of an Individual Child can Lead to Appropriate Support

Yoshiyuki NISHIGAKI, Harumi HASHIMURA, Kouzi SUZUKI, Naoko NISHIGAKI,  
Noriko DALRYMPLE, Yasuko OKADA, and Yoko TERAMI

本研究では、保育者が対応に苦慮した子どもが、1年の保育を通して、保育者と良好な関係を結ぶとともに、クラスの一員として位置づき、保育者から自立していくまでの過程において、どのような保育者の関わりの質の変化が存在したのかを明らかにした。また、気になる子に関する個の指導計画を作成する際に求められる子どもの実態を捉える観点について明らかにした。この研究を通して、気になる子との関係を築くために保育者に求められることとして、①子どもの実態に応じて意識を変化させること ②子どもに、自分のことをわかってもらえているという実感を持たせること ③こうせざるを得ないという感情に根ざした行動 ④子どもにとって自分がかけがえのない存在だとうことを実感すること 以上4点について確認できた。

個の指導計画作成のための基礎資料となる『子どもの実態』を捉える質を左右する観点としては、①対象となる子どもの心の動きや行動の意味を深く捉えられているか ②時期を追いながら、その行動の意味の変化を比較検討しているか ③子どもの行為によって保育者の感情が大きく揺さぶられた経験や、気になる子に対する保育者自身の感情の動きを見つめられているか 以上3点について確認できた。

キーワード：行為の意味 関係性の変化 子どもの実態 個の指導計画

#### 【研究目的】

子ども（人）は、自分の感情を心地よい状態に仕立てていくように行動するものである。また、その根底に、心地よさを求める心の動かし方がある。何かの葛藤状態に陥ったとき、子どもはその感情の乱れに対して、自分が心地よいと思える方向に心を動かしながら、安定をはかろうとする。こうした心地

よさを求める心の動かし方はどのような体験や育ちの中で起こるのだろうか。その基盤は生理的な欲求を満たされたり、身体感覚からくる心地よさを繰り返しもたらされる経験であろう。

生理的欲求の充足や身体的接触による心の充足は、周囲の大人の働きかけによってもたらされる。そうした働きかけによってもたらされた心地よいという基準が形成されることで、子どもはその時味

1) 教育学部 2) 本巣市立真正幼稚園 3) 岐南さくら南保育園 4) 中部学院大学短期大学部 5) 神戸松蔭女子学院大学

わった心地よさを再現しようとし始めるのである。つまり、子ども自身が実感すべき最も大切な感情の動きは、「心地よさ」である。生理的な欲求の充足や身体による接触は、子どもが心地よさを実感するために最も重要な関わりと言える。さらに、筆者等は子どもが自身の感情の動きに気づいたり、自分の感情と上手くつきあえるようになる過程には次のような項目があることを捉えてきた。<sup>1)</sup>

- ①周りの大人によって、生理的、情緒的に心地よい状態をつくってもらふ体験
- ②自分の感情を素直に表出し、それを受け止めてもらいながら、自らの感情の動きに気づいていく体験
- ③周りの大人によって気持ちをおさめ、切り替えてもらう体験
- ④生活や遊びの中で自分の感情をぶつけそれに対して返ってくる反応を調整していく場に出会うこと
- ⑤様々な生活や遊びの中で自分の感情を豊かに動かす体験をすること

これらの体験は、普通の生活を営んでいれば、子どもがあたりまえのように体験する内容である。しかし、そうしたあたりまえの関わりが家庭でなされていないという現状もある。

さて、筆者等は保育の現場を研究のフィールドとしており、保育者との研究会に出向く中で「気になる子の存在」を聞かされるのが度々ある。とりわけ感情の起伏が激しい子、行動が粗雑である子、他者に危害を及ぼす子ども等については、特別な配慮のもと保育を進めていく必要がある。こうした子どもに対しては、その子の実態に応じるという基本的なスタンスに立って保育を進めていくことが求められるため、個別の指導計画を作成している現場も珍しくなくなってきた。個別の指導計画を作成するには的確なその対象児の実態把握が求められる。つまりそれは深い幼児理解に基づく子どもが気になる行動をとる背景や要因の分析と言い換えることができる。その的確な分析に基づいた関わりを繰り返すことによって、その子に情緒の安定、遊びに向かうエネルギー、他者への関心や交流が生まれ、発達が促されるものと考えられる。

本研究では、入園当初より感情の起伏が激しく、対応に苦慮した子どもが、保育者との関わりを通して徐々にクラスの一員として位置づき、保育者から

巣立っていくまでの実践記録を対象に行う。その中で、子どもの葛藤に保育者がどのように向き合っているのか、またそこにどのような保育者の関わりの変化が存在したのかについて検討することを第一の目的とする。また、気になる子に関する個の指導計画を作成する際に求められる子どもの実態を捉える観点について、事例検討の過程で読み取れた内容から明らかにすることを第二の目的とする。

## 【研究方法】

1年を通じ保育歴4年目の男性保育士（以下S保育士）が記録したエピソードを時系列に並べ、保育のフィールドを持つ研究者等6名で検討する。

### 1) 事例検討の対象

G県M市、保育歴4年目のS保育者の保育記録を対象とする。対象児は4歳児入園I子である。I子は入園6カ月後に社会性の遅れがあることがわかった。

### 2) 検討対象

- ①S保育者によるI子との葛藤場面をエピソード記述によって描出。
- ②I子が葛藤している場面を中心に、I子の行動からI子の心の動きを検討。
- ③I子とS保育者の葛藤場面を抽出し、S保育者の心の動きを検討。
- ④I子とS保育者の関係性が変化していく場面について検討。
- ⑤I子の変容とS保育者の変容について検討。

### 3) 各エピソードに対する結果と考察のスタイル

各エピソードでは子どもの行動に関する検討と保育者の子どもへの働きかけの意味についての検討を行う。

## 【結果と考察】

### <A>エピソード検討

『4月当初のI子の姿の概略』

- \*バス登園してきてもバスから降りようとせず、部屋に入ろうとしない。
- \*一緒に部屋に来て、部屋の隅で腕組みをして一日中立っている。
- \*感情の起伏が激しい。一緒にいて落ち着いたかと思うと、他の子や他の保育者と目があったり、声

をかけられると突然怒り出す。

\* トイレは一緒に行こうとしても行かず、一度もトイレに行かずに帰園することが続く。

\* 給食・おやつにほとんど手をつけない。

[エピソード1] 4月中旬

朝、バスに乗って帰るが、保育園に着くと降りようとしないう。何とか降ろしたあと下駄箱の前まで行くが、くつを脱がず、じっと下を向いて立っている。I子に「Iちゃん、一緒に部屋に行こうか」と声をかけると、「フン」と横を向いてしまう。まだ、園に慣れていないと思い、手をつないで行こうとすると、突然たたいたりけったりしてくる。しばらくすると気持ちは納まるがくつは脱ごうとしないので、保育者が脱がせ抱いて部屋へ行く。

注) 下線部は保育者からI子への働きかけ 以下同様

<考察>

この時期I子は、新しい環境に対してまだ慣れず、見知らぬ場に身を置くこと、見知らぬ人と出会うことに不安をいだいていたことが想像できる。これらの姿は頑なに外界に対して自分の気持ちを閉ざす姿である。閉ざしている気持ちをときほぐそうとS保育者が身体の接触を試みるのだが、そのことがI子にとってはさらに不快な思いを助長し、攻撃的な行動を表わすことになったと推測できる。

この事例には気持ちを閉ざしているのにもかかわらず、親密性の表現である身体の接触を試みようとする一方的なS保育者の行為に対して、それを拒もうとしているI子の姿が描かれている。その時、I子にとってはS保育者を受け入れる準備ができていない状態であるにもかかわらず、身体の接触をしようとする保育者に対する嫌悪を表している。その嫌悪がS保育者を拒否することになり、それが怒りの感情を表出することにつながった。

**保育者の働きかけの意味：**

**I子が不安だろうという一方的な判断から手をつなぐ行為**

[エピソード2] 5月中旬

S保育者と一対一で手をつないでいたり、身体を持ちあげられたりしながら遊ぶと、笑顔が見られたり手を離して一緒に走り回って遊ぶこともあった。しかし、一緒にいる時に、他の子どもや他の保育者が「Iちゃん」と声をかけたり近づいたりすると笑顔がなくなり、腕組みをして立ち止まってしまう。その後S保育者を叩いたりけったりしてきたI子が、突然ドラエモンの話をし始める。また、S保育者が他の子とドラエモンの話をすると「もう知らないよ！Iちゃん怒ってるよ！」と叫び怒る。

<考察>

ここには身体の動きによってI子の気持ちがあほぐれていく姿が描かれている。身体の動きは感情の動きを生み、それが笑顔につながっている。気持ちがほぐれることで、さらに走り回るという活動が起きる。また、I子がS保育者に少しずつ気持ちを開き始めていることが読み取れる。しかし、それはS保育士との関係性だけに限定されており、この時点ではS保育者以外の他者は、I子にとっては頑なに閉ざすべき存在であった。I子にとって他者は、担任と自分との関係性を脅かし、不安をもたらす対象であり、嫉妬の対象にもなっていることがわかる。他者に対する気持ちを閉ざす行為は腕組みという形で明確に現れている。さらに、担任を蹴る姿から、自分が独占したいという気持ちを、相手を拒否する行為（叩く行為）で表している。叩くという行為は直接的な拒否の姿ではあるが、その後、「怒っているよ！」という表現は、そうした怒りを言葉で表しながら、保育者との関係性をなんとか維持していこうとする姿として捉えることができる。そこにI子自身がS保育者との関係をどのように保っていくかを葛藤している姿（ジレンマ=二つの相反する事柄の板挟みになること）を読み取ることができる。つまり自分の思いを分かろうとするS保育者の存在に気づきはじめながらも、自分の内に生まれてきた負の感情である相手に対する怒りにも共感してほしいという思いが生まれてきたと思われる。

**保育者の働きかけの意味：**

**一月半生活を共にすることによって、少しずつI子との関係が築かれてきたことを土台とした身体の接触**



[エピソード3] 5月下旬

入園からこのころまでほとんど園のトイレにはいけなかった。トイレに行けず我慢していたが出してしまい、その場に立っていた。それを見て、着替えをさせようとした。ぬれた下着を脱がせたり、きれいに拭こうとすると怒り出し、保育者をける。突然のことに、自分自身、訳がわからず、I子に「どうしてけるの？きれいにしようと思っているだけなのに。なのになんでけれなきゃいけないの？」と怒ってしまった。その後は渋々着替えさせることができた。そんなことが数日続いたある日、また、排泄を失敗してしまったので、ぬれたものを脱がせようとすると「お母さん怒るよ」といい出した。それを聞き、家庭で怒られているので、園でも怒られると思っていたんだなあと思い「そうか、お母さん怒るんだ」と受け止めると頷いた。続けて「でもね、濡れてたら気持ちわるいでしょ。出たのはしかたないから先生に言って。すぐにきれいにするから。出そうな時は言ってね。一緒にトイレに行こうね。」と話をすると素直に着替えることができた。それからは汚れても着替えができるようになった。

<考察>

S保育者のI子に対する怒り=非受容的な態度は、I子にとってどのような意味があったのだろうか。それまでI子の気持ちに寄り添い受容的な関わりに徹してきたS保育者の今までにはない態度に、I子自身戸惑いを持ったことが予測できる。しかし、その後、渋々ながらS保育者が着替えさせようとする行為を受け入れるようになったのは、頑なな自分を少し譲った姿である。それまで受容的な態度でS保育者に接してもらったことによってもたらされた心地よい感情を継続しようとして、I子はS保育者の行為を受け入れようとしたのではないか。さらに、そうした心地よい関係が基盤にあるからこそ、「お母さん怒るよ」と自分の家庭での心地の悪い状況を訴えることができた。I子にとってS保育者は母親とは異なり、そのままの自分を受け止めてくれる存在となり、園生活の中で素直な自分を表現する土台が築かれたものと思われる。

この事例に見られる怒りの表出や相手を蹴ると言う行為は、一般的には否定されるべき感情の表出として受け止められる傾向にある。しかし、こうしたはっきりとした行為（怒りという行為や蹴ると言う行為）は、周囲に対するインパクトが強いため、周囲の人から明確な反応が返ってくる可能性が高くなる。結果、その反応を読み取ることで、激しい感情の動きを子ども自身が自覚する過程となる。また、I子は今まではあまり見たことがないS保育者の怒りという意外な態度によって、自分の乱れた感情にそれまでとは異なる感情の流れをつくり、気持ちを切り替えることができたと考えられる。

保育者の働きかけの意味：

- 基本的な生活そのものを支えることによって、I子からの信頼を獲得する行為
- I子の不安を支え、心地よい状態を作り出そうとする行為。

[エピソード4] 6月中旬

手をつないでふたりだけでいる時間をつくっていくと「ドラエモンのビデオあるよ。ドラミちゃんもでてきたよ」と話し始める。「ビデオがあるんだ。いいな。先生も見たいな」と言う。「M君（I子の兄）も見てるよ」と兄の話が出てくる。「そうか。お兄ちゃんも見てるんだ。お兄ちゃんもドラエモン好きなんだね」と言葉を返すと、笑顔になり、保育者の手や腕、時には足の指までなめてくる。「やめて」と笑いながらI子に言う、I子も笑いながらより一層なめ始める姿があった。

<考察>

ここには、時期を経てさらに担任とI子の関係がより親密になってきた状況が描かれている。一つは、S保育者が知らないだろう家での話をしている姿から、I子が自分にまつわる様々なことを知ってほしいという気持ちを汲み取ることができる。それは自分への関心を深めてほしいという願いの表れである。その気持ちを受け入れられることで、一段と自分が受け止められたことを実感したI子は「なめる」という行為を通して、直接的にS保育者に対する好意の感情を表現することになった。またなめる

行為は自分の中に相手を取り込み所有しようとする行為としても映る。このように、確実にI子との関係性が良い方向で変容してきたことを読み取れる。

**保育者の働きかけの意味：**

**私を見てほしいというI子の欲求に応えようとする行為。またそれによって生まれる保育者を独占したいという気持ちを受け止める行為。**

[エピソード5] 6月25日

この日は老人クラブの交流会ということで、みょうがぼちづくりを見学してから、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒にそれをたべるようになった。一緒に食べる時間になったが、I子は食べずにいた。するとあるおばあさんに「食べないの?」と聞かれた。I子はその瞬間に怒り出し、外に出て行ってしまった。外は雨が降り始めていたが、自分から保育室に入ってこようとしないI子に対して、今日とはことん一緒につき合おうと思ひ、水着に着替えて2人で雨の中にしばらくいた。なぜ、自分が雨の中になくはないかと思ひ、「こうせざるを得ない」という気持ちになっていた。

<考察>

「食べないの?」と投げかけたおばあさんは、I子にとってS保育者とは異なる関わりをしてくる人として映ったことだろう。S保育者は自分の気持ちに寄り添った関わりをしてくれる人であるが、おばあさんはそうではなかった。I子がS保育者から見えないところには行くことはなかったことから、I子はS保育者との距離を測っていたと予測できる。それはS保育者の視界が届く範囲であり、S保育者がすぐにとんでこれる範囲である。

それでは、S保育者がI子につきあおうと思っただけなのだろう。S保育者はそれまでI子の気持ちに寄り添おうと努力していた。しかし、交流会でI子が出会ったおばあさんには思ひを汲み取ってもらえず、その場を立ち去ってしまったことをS保育者は把握している。S保育者はそこで、I子のことを可哀想に思っただけだろう。また不憫に思っただけなのではないか。それは同時に、I子のことを支えていけるのは、自分だけかもしれないという思ひを、

S保育者に抱かせた。そうした感情の動きが、「こうせざるを得ない」という行動を起こさせた。「こうせざるを得ない」という気持ちの動きは、今までのI子との関係性の中で育まれた感情である。そうした感情に基づく行動を起こすほど、S保育者はI子の状態に巻き込まれていたといえる。

**保育者の働きかけの意味：**

**自分の気持ちを押しさえきれずに起こした雨の中で濡れるというI子の行動に対して、「こうせざるを得ない」という気持ちで応えようとする行為**

[エピソード6] 7月上旬

この頃、特定のカーテンにくるまって怒ることが多くなる。追いかけ声を掛けると一層くるまってしまふ。しばらくして「いこうか」と手を延ばすとカーテンから出てきて手をつなぐようになる。

<考察>

カーテンにくるまる行為は、あえてS保育者から見えなくなることで、見つけてほしい、構ってほしいという意味もあるのではないかと。それはS保育者が自分を見てくれることを確認する行為でもあったと思われる。また、カーテンにくるまることは外界と自分を遮断する意図的な行為である。外界を物理的に見えなくすることで外界を閉ざすことになり、気持ちを安定させようとしていると捉えることもできる。カーテンという布によってくるまることで、その心地よさから安定を図ろうとする姿と捉えることもできる。

さて、I子はこれまで、人という相手に向けて自分の怒りを訴えていたが、これは「もの」にくるまるという行為によって、気持ちを静めていこうとする手立てを身につけた姿と受け止めることもできる。つまり感情を外に出して昇華するのではなく、内に収め処理しようとする力が育ってきたと考えられる。

**保育者の働きかけの意味：**

**自分のことをいつも見てほしいと願うI子の気持ちを受け止め、声を掛ける行為** エピソード4・5から読み取ったI子の葛藤に対して寄り添う行為を繰り返すことによって、その子の現状

## を受け止め、気持ちを安定させようとする行為

[エピソード7] 7月中旬

I子を落ち着かせようと「Iちゃん怒っていてもわからないから、何がイヤだったのか言っ  
てごらん」というと、保育者の顔に唾を吐いた。  
初めてのことで驚いたが、いけないことを知ら  
せていこうと思ひ、本気で怒った。すると次か  
ら怒り出しても保育者に唾を吐くのではなく、  
床に唾を吐いたり、時には、自分の体にかけた  
り、手のひらに唾をだしてくちやくちやくと握  
るような行為をする。このころから腕組みをす  
ることはなくなってきた。

### <考察>

唾を吐くという行為は、自分の感情の揺らぎをその行為によって緩和する意味があったのではないか。唾は否定的な感情の塊そのものなのかもしれない。この頃になると、I子にとってS保育者に否定されることは自己存在を脅かされることにつながるようになってきたと思われる。だからこそS保育者が本気で向き合ってきたことに対して、自分の感情をぶつけ返すことによりさらに関係が悪化するという懸念を抱いていたのではないか。そのため、保育者以外の「もの=床」や「自分の体」に唾を吐き、自分の気持ちの安定を図ろうとしたものと考えられる。

これまでS保育者はI子の怒りのはげ口の対象になっていた。またそうした感情の乱れを受け止める対応を一貫して行ってきた。それに対して、「何かイヤだったら言っ  
てごらん」という言葉をI子は受け止められなかった。I子はS保育者が自分の気持ちをわかってくれないと思ったのである。その結果I子は、その気持ちの乱れを押さえきれず、S保育者に唾を吐いたものと思われる。しかし、本気で怒られることでかなりのエネルギーをもって、怒りを床へ向けたと予測できる。I子はこの時、怒りの矛先を保育者ではなく他のものに切り替えたのである。ここに複雑な心の動かし方を読み取ることができる。

このようなことができるようになったのは、S保育者がそれまでその子の感情の乱れを受け止め、丁寧につきあってきたからである。I子はこうした関

わりを通して、自分の感情の動きに気づき始め、怒りを出す方向性や怒りを出す対象を調整できるようになってきた。そこにI子の育ちを感じる事ができる。

### 保育者の働きかけの意味：

これまでの関わりで少しずつI子との向き合い方がわかり始めてきた保育者。しかし、I子の唾を吐く行為に対して、**図らずも自分の腹が立つ感情を素直にぶつけてしまった行為**

[エピソード8] 9月上旬

4月・5月の頃は給食やおやつにほとんど手をつけようとしなかった。このころになると、部屋ではまだ給食を食べられなかいが、テラスでままごと用のテーブルの上にナフキンを置き食べさせれば、食べられるようになってきた。しかし、部屋の中の子の様子も気になるため、「〇〇ちゃん、おかずも食べないかんよ」と他の子に声をかけると、突然I子は怒り出し、口の中の物を吐き出した。連日こんな姿があり、I子と一緒に給食を食べながら急に気分が悪くなり、保育者自身が吐いてしまった。

### <考察>

I子にとってS保育者はどこまでも自分の思いに寄り添い、その気持ちにに応じてくれる人として映っていた。自分のために骨身を惜しまず給食が食べられる環境をつくってくれるくれS保育者を「自分にとって特別な存在」とみていたと思われる。S保育者はI子にとって自分だけの担任なのである。自分だけのものだからこそ、S保育者が他の子に声を掛けることを許容することができず、怒りに変わるようになった。

この怒りの表現は嫉妬というよりも、S保育者への強い独占欲によってもたらされる怒りである。またI子が吐き出す行為は、彼女にすれば必然的に自分に目を向けてもらえる行為となった。そうしたI子のS保育者に対する強い思いをS保育者自身、無意識に感じていたことだろう。そうした独占欲がでてきたI子の姿をS保育者が見て、I子以外の子ども達とのこれからの生活を思ったとき、どのように対応すれば良いのか全く見通しをもつことができ



ず、その不安が吐くという行為に結びついたものと思われる。一方、そうしたI子の強い思いにも応えてやりたいという気持ちのなかでS保育者は葛藤していたと予測できる。

このケースもI子は怒りの対象をS保育者本人に向けるわけではなく、口の中に含んでいたものを吐き出すという行為によって昇華していることが分かる。吐き出す行為は、自分の中にため込んだものを開放するという行為である。ため込む対象はもちろん口に含んだ食べ物であることは言うまでもないが、吐き出されたときに、それは食べ物に加え、その子自身の内に貯まった怒りのエネルギーが包含されていると思われる。

#### 保育者の働きかけの意味：

これまで保育者自身との関係が徐々に築かれてきたのだが、I子とのこれからの関係に再び見通しが持てなくなり追い詰められた結果、身体に症状がでた状態

[エピソード9] 10月中旬

9月ころから怒り出すと物を投げたりけったりする姿が見られるようになってきた。それがひどくなり、友達に当たりそうになることが多くなってきた。物を投げることはいけないということを言うと、さらに怒り出すI子。I子の自分ではどうしようもできない感情を受け止めつつも、いけないことは知らせていこうと話をしていく。その際泣き方が以前の怒りを前面に表すものではなく、甘えているような泣き方をする。このころ、N病院に母親がI子を連れていき、社会性の発達において2歳半くらいの発達という診断を受ける。

#### <考察>

自分の怒りをどのように処理すれば良いのか分からず、ものを投げることによってしか処しきれない状況が続いていることが分かる。しかし泣き方をみると、保育者から否定されることへの恐怖が生まれてきたことが予測できる。それが甘え泣きという形で表れてきたものと思われる。

エピソード8でも触れたように、怒りの感情を吐き出すものに包含している姿と同様に、これは、「も

の」に自分の怒りの感情を託し、ぶつけるという行為によって、自分の感情を吐き出し、安定を計ろうとする場面である。保育者は、今までの受容的な姿勢やどのように対応してよいのか分からない姿勢で対処するのではなく、「いけないことを知らせていこう」という表現からも分かるように、その怒りに向き合おうとした。向き合うことによって、I子は自分自身の存在を否定され、捨てられるかも知れないという恐怖や不安を感じ、「甘える」という行動をとったものと予測できる。これは以前とは異なる姿である。以前ならば、S保育者がI子の感情に真っ向から向き合うことによって、さらにその感情がエスカレートして表現されることになった。それは、相手の気持ちの動きに気づいていないということに加え（相手がそのことをどのように受け止め反応してくるのかへの見通しが持てない状態）、相手の存在を失うことへの不安や恐怖心を抱くことはなかったからだと思われる。つまり、I子とS保育者との関係が良好になってきたことにより、以前よりI子が保育者の心の動きを読めるようになってきたため、その存在を失いたくないという気持ちがI子自身の中に生まれ、自分の怒りを抑える対処が可能になってきたと思われる。

#### 保育者の働きかけの意味：

I子への援助のあり方を迷いながらも、I子の気持ちに寄り添うのではなく、社会的に許されないI子の行為を率直に否定する行為

[エピソード10] 11月

登園バスから降りて保育者から「Iちゃんおはよう！」と声をかけられると急に怒り出す。その後甘えているように大泣きする。部屋に一緒に行こうと思い、抱っこすると降りようとはしないが、たたいたりつねったりする。落ち着いてくれることを願って抱っこをしていると、赤ちゃんのように身を保育者に委ねて静かになった。

#### <考察>

登園直後の怒りとその直後の大泣きは、社会性の未発達な子どもに良く見られる姿である。しかし、何らかの形で自分の気持ちを表出するのは、S保育

者に自分の傍に来てもらうための手段になっていると予測できる。また、S保育者が子どもを抱くという行為は、どのような場合にも、無条件であなたを受け入れることを意味する。つまり、I子はS保育者に抱かれることで、自分の身体と同時に、自分の今のイライラする心の状態も受け入れられたことを感じるようになる。また、I子はこの場面で、叩いたり、つねったりするけれども、保育者から降りようとする気配がないのは、I子自身がS保育者から突き放されることへの不安の裏返しとして捉えることができる。最終的に赤ちゃんのように身を委ねる姿からも、S保育者のことを信頼し保育者を甘えの対象として捉えられるようになったことが分かる。

I子は本当は素直に甘えたいのにもかかわらず、なぜ怒るのか。怒るという表現をすることで、I子は自分に対する保育者の思いの強さを測っていることが予測できる。「保育者は本当に甘えられる存在なのだろうか。保育者は自分を見捨てない存在だろうか。」こうした思いを抱きながら、試している行為として捉えることもできるのではないかと。S保育者にしても、この日の怒りに出会って理不尽な思いを持っただろうが、最終的にI子が身を委ねて身体を委ねてくることから感じられるその重みや暖かさから、I子が本当にS保育者自身の存在を必要とし、その存在がI子の今を支えているということを実感する場面になったものと思われる。また、エピソード9・10では、S保育者はI子に対して素直な関わりをし始める。それはそれまでI子とつきあいながら培われた「自分がいないとだめだんだ」「自分を頼りにしているんだ」という気持ちが生まれてきたことによる自信に裏打ちされた行為なのではないかと思われる。

**保育者の働きかけの意味：**

**I子の感情の乱れをそのまま身体で包み込むことによって受け止める行為**

[エピソード11] 12月中旬

朝いつものように保育者と手をつなぎ、外に出てきたが、他の子が「かくれんぼしよ！」と保育者を誘ってきたので、I子に「一緒にやろうか？」と言うと頷いた。かくれんぼがはじまった。最初は保育者と一緒に鬼をして友達を

捜していたが、D男が「先生鬼やってよ！」と言うので「Iちゃん、D男君と一緒に隠れる？」と尋ねると。D男と手をつないでかくれるようになった。しばらくして、自然にかくれんぼが終わって、D男や他の友達と手をつないで走り回る姿があった。

**<考察>**

この時期になっても、I子にとってS保育者の存在が園生活における拠り所であることが分かる。ただ、これまでなら、保育者が離れたり、他児と関わろうとする際に、怒りという感情表現が生まれてきたにもかかわらず、少なくともこの事例ではそうした表現が起こらなかったということに目を向ける必要がある。また、S保育者が近くにいることが分かれば、少しS保育者から距離が置けるようになってきたことがわかる。また、S保育者との関係が築かれることで、他者にも目を向けることができるようになっていたものと思われる。S保育者との関係構築によって、人に向かう基本的な安心感を学習し、S保育者以外の他者も良いものだという感覚が生まれてきたと思われる。この事例からは、S保育者がI子の怒りの感情に対して受容的な態度で接するプロセスを踏むことで、I子が自分の怒りの感情を上手く処理しようとする力が身につけてきたことがみえてくる。

**保育者の働きかけの意味：**

**I子と自分（保育者）との関係性（絆）への確信を感じ、他児へとの関わりを期待するために他児に目を向けようとした行為**

[エピソード12] 1月

U子とM子がI子を誘いにくると手をつないでままごとをやり始める。最初I子はU子と手をつないでいたが、しばらくするとU子がお皿に食べ物を乗せ、M子に「どうぞ」と手渡し、それからU子はI子のほうに戻ってきた。すると突然I子は怒り出し、U子が手をつなごうとしてもU子の手をたたいてしまう。I子の気持ちとU子の気持ちをどちらにも伝え、U子にはI子が落ち着くまで待ってもらい、I子には一緒に時間を過ごしながらかくくのではなく言葉



で伝えるように話していった。しばらくして、U子が誘いに来てくれると、手をつないで再び遊び出す。

<考察>

I子とU子との関係性は、これまでのI子とS保育者との関係性のプロセスと同様の過程を踏んでいることがわかる。つまり、U子はI子にとっては独占したい対象となった。自分だけを見てほしい、自分だけと遊んでほしい対象として捉えていた。だからこそU子がM子にもものを差し出したとたん、つまり気持ちを向けたとたん、U子に対する怒りが生まれてきたのである。

S保育者との関係性の中で怒りの感情を少しずつ処理できるようになったI子は、次は大好きなU子＝友達との関係性の中で怒りの感情を処理するスキルを学んでいくようになる。つまり、U子の気持ちが、物理的に一時自分から離れても、気持ちはまたI子自身に向けられるものなのだという学びをすることになった。

**保育者の働きかけの意味：**

**周りの子とのつきあい方のスキルをI子に伝えようとする行為**

[エピソード13] 3月中旬

いつものように、朝、バスの出迎えをし、I子が降りてくるのを待っていた。バスが来て、I子を見ると怒ることもなく、きちんと座っていた。降りる時も順番を待っていた。降りてきたのを見て、「Iちゃんおはよう！」と声をかけ、手をつなごうとすると、いつもなら、すぐに手をつなぐのに、そのまま自分の下足箱の方へ行った。あれっ？と思いつつも「Iちゃんじゃあくつ脱いでね。一緒に行こう！」と声をかけた。しかし、保育者がスリッパを片付けている間に、一人で部屋に行ってしまった。

<考察>

保育者との関係が確立される中で、I子は心が満たされ、穏やかな気持ちで登園できるようになってきたと考えられる。I子はS保育者に愛されている自分を発見することで、自立していったように思わ

れる。それは、S保育者にとって嬉しいものであろうが、「一人で部屋に行ってしまった」と表現している。本来なら保育者は「一人で部屋に行くことができた」と書き残すのではないだろうか。この点については、今まで保育者から離れようとしなかったI子が、突然一人で行ってしまい、内心寂しさを感じる複雑なS保育者の思いが表現されているように思う。

**保育者の働きかけの意味：**

**I子の成長を感じ、I子が自立していく姿をうれしく思いながらも、寂しさを感じ声をかけようとする行為**

<B>保育者のI子に対する意識の変容のプロセスから読み取れる考察

一連の事例の考察を通して、I子は怒りという感情と向き合い、それをどのように処していくか、葛藤してきた姿を読み取ることができる。一方、S保育者はI子の怒りに応じて、随時自分の関わりを変化させながらI子の発達を促そうとしてきた。各エピソードから読み取れた<保育者の働きかけの意味>のつながりから、S保育者がI子に対してどのような心情の変化があったかについて検討する。

S保育者は年度当初I子に対して、【何も知らない状態】で向き合っていた。(ep1) そのため、保育者としては関係を築くため、手をつなぐという行動を起こしているのだが、それを拒否されることによって、初めてI子に寄り添おうとする意識が生まれた。こうした意識の変化と具体的な関わりの変化によって少しずつI子が保育者を信頼する気持ちが生まれてきた。その信頼する気持ちが、S保育者とは他児への攻撃性(ep2)として表れている。

ep3/ep4の時期には、S保育者は少しずつI子が自分に気持ちを開いてきたことを感じ、さらにI子を支えてあげたいという感情が生まれてきたことだろう。I子はI子でS保育者が自分に向けてくれる肯定的な思いを感じ、それ以前より自分の葛藤を素直に様々な態度で表すようになった。そのことに対して、保育者は複雑な気持ちの動かし方、つまり受け止めてあげたいけれど、全面的に受け止めることができないという思いを抱き、保育者自身もかなり葛藤していた時期と予測できる。そして、ep5に見られるような、「こうせざるを得ない」対応が生まれ、

抜き差しならない関係へと変化していった。そのため保育者はかなり疲労していたことが予測できる。その結果、ep9に見られる本気で怒る行為が表れたり、食べ物を吐くという姿(ep8)が表れたりした。しかし、このころにはS保育者とI子との関係は確固としたものになっていたことが推測できる。そのため、S保育者がI子を否定する(ep9)ことがあったとしても、保育者はI子から強い甘えを感じたり、ep10のようなI子が身を委ねる様子から、自分の存在こそがS子を支えていくために必要なのだという感覚を持ち、それまでのI子への関わりに自信が持てたのではないかと推測される。結果、I子との関係はどのようなことがあっても崩れないと言う実感によって、自信をもってI子に対して適切な指導を行うようになったのが、ep11 ep12に表れる姿である。ep13のI子がS保育者から自立していく姿により、S保育者は、うれしさと寂しさという2つの思いが錯綜してしたことであろう。そうした思いを持ちこたえていくことも、保育者には求められることがわかった。

保育は子どものために骨身を惜しまずいろいろなことをしてあげたり、共にその子の苦しみにつきあったりする営みである。とりわけ葛藤を抱える子どもにつきあうためには多大のエネルギーが必要となる。そのために、周りの大人が丁寧に子どもの心情を読み取り、その時の子どもの発達課題をつかみ、それに対する適切な対応を試みることによって、子どもの育ちを保障することになることを改めてこうした事例検討を通して理解することができた。さらに、保育者が気になる子どもに向き合うとき、寄り添っていくという基本的な姿勢が常に存在することで、たとえ大きくお互いの感情が乱れたとしても、子どもは保育者をなくてはならない存在として認めていくことがわかった。結果、そうした関係性の成立によって、気になる行動に対する適切な指導が可能になることがわかった。

### 【総合考察と今後の課題】

気になる子どもへの対応について、保育現場が様々な困難性を抱えている現状にある。しかしこの事例検討からも明らかなように、子どもの発達保障のためには、『子どもの実態の読み取り』が深くなされることでよりの確な援助・指導が可能になるこ

とがわかった。その際、対象となる子どもの心の動きや行動の意味を深く捉えることはもとより、時期を追いながら、その行動の意味の変化を比較検討することが求められることがわかった。また、とりわけ子どもの行為によって保育者の感情が大きく揺さぶられるケースにおいては、保育者自身の感情の動きを見つめたり、子どもへの関わり方の行為にどのような意味があるのかを丁寧にみつめ解釈することで、その時の子どもと保育者の関係性がより明確になり、援助・指導への道筋が明確になっていくことがわかった。

このようなことから、気になる子どもの個別の指導計画を作成する際には、上記に挙げた内容の記述を意識的に行えるような、あるいはそうした内容の記述を誘導するような指導計画の様式(フォーマット)が求められるものと考えられる。今後、その点についてさらに検討を深めていきたいと考える。

### 引用文献

- 1) 『子どもが自分の感情を上手に調整するまでのプロセスに関する研究』 西垣吉之 西垣直子 寺見陽子 他 発達障害支援研究第10号 P41 2012

### 参考文献

- 『保育・親支援における受容と非受容の意味に関する考察 -かみつきが続くA子と保育者の関係性の変容過程を追いながら-』 西垣吉之・西垣直子・山田陽子・寺見陽子 中部学院大学中部学院大学短期大学部 研究紀要 第8号 P75~83 2007
- 『保育における育ちをとらえる視点に関する一考察 -つなぐ行為から-』 西垣吉之 山田陽子 西垣直子 中部学院大学中部学院大学短期大学部研究紀要第5号 P41~56 2004
- 『子どもの心が複雑化・立体化していくことに関する一考察 -心地よさを形成するという観点から-』 西垣吉之 西垣直子 山田陽子 寺見陽子 中部学院大学中部学院大学短期大学部研究紀要第4号 P23~31
- 『子どもが自分の感情を上手に調整するまでのプロ

セスに関する研究』 西垣吉之 西垣直子 寺見陽子 他 障害支援研究第10号 P26～P42 2012  
『保育行為の妥当性を判断するための手立てに関する研究 -園で発達課題を抱える子どもの生活の場を変えることに着目して-』 西垣吉之 西垣直子 橋村晴美 障害支援研究 15号 2015

**追記：**本研究は、H12年日本保育学会大53回大会で発表した『子どもの自分づくりを支える保育者の

関わりⅠ ～子どもの自己存在感の形成と保育者の受容的・共感的関わりの意味～』および『子どもの自分づくりを支える保育者の関わりⅡ ～子どもの内的世界における他者の位置づけと重要な他者としての保育者の役割～』で利用した保育記録を素材に、今回の研究主題に基づく分析を行ったものである。

(2015年12月18日 受稿)